

5

特 253

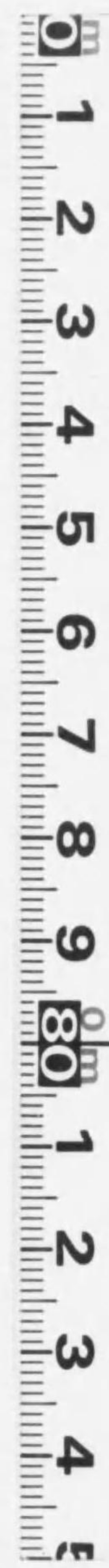
584

新聞社 婦人部 編

# 職業婦人も

# 女房方に持てば

定價十錢



# 始



3  
6

世界の通信網を一手に握る

# 讀賣新聞

帝都三大新聞の隨一



生氣發洩たる	政治面
最も權威ある	經濟面
報道機敏なる	社會面

特	本日	の	一	本	日
色	あ	る	新	聞	の
婦	文	科	宗	演	ス
人	藝	學	教	藝	ポ
欄	欄	欄	欄	欄	ー
欄	欄	欄	欄	欄	ツ
欄	欄	欄	欄	欄	ラ
欄	欄	欄	欄	欄	チ
欄	欄	欄	欄	欄	オ
欄	欄	欄	欄	欄	カ

他の追隨を許さぬ  
本紙の特色

讀賣新聞社婦人部編

職業婦人を女房にもてば



東京 森田書房發行



目次

ひと月振で夫婦が

【夫】 茂原英朗君

撮影所で『ヤア』

.....一

タマには一緒に御飯が食べたい

【妻】 飯田蝶子さん

西と東に街を流す

【夫】 伊東吉二郎君

夫婦チンドン屋

.....五

但し旅先では存分に惚ける

【妻】 つかさん

私が癪癪起しても

【夫】 横田洋一君

良人は怒らず 暖簾と腕押し

.....九

収入は一緒にして掻き混ぜる

【妻】 四家文子さん

奥さんからいたゞく

【夫】 上田博一君

主人の小遣は 一日五拾錢也

.....二三

干渉するなら別れる——と奥さん

【妻】 ロシー・上田さん

新橋驛で夫婦が

【夫】 三上 潔君

坊やのリレー

.....二七

妻子の留守の家庭は寂しい

【妻】 藤蔭桃枝さん

時間は別々子供はなし

【夫】 ボール・ケート君

私寂しいです……………二〇

——とヌルマ湯國際結婚のご夫婦——【妻】マス・ケートさん

男性無能を論ずる 【夫】日比勘三郎君

社長もまた女？……………二四

出がけに夫へ「行つて参ります！【妻】惠美子さん

月に一度の逢瀬で 【夫】谷口二部君

いつも新婚気分……………二九

マドロス夫婦に喧嘩の種なし 【妻】光子さん

あすの日を楽しみに 【夫】丸山 薫君

詩人とマネキン嬢……………三三

物質と心を交換しながら！ 【妻】三四子さん

妻は看護婦代りに 【夫】相馬求平君

良人はホテルの帳場……………三六

夫婦喧嘩は絶え間がない！ 【妻】みえ子さん

妻の留守には亭主が 【夫】鷺塚誠一君

皿洗ひも洗濯もする覺悟……………四一

亭主づらでは共稼ぎ不可能!

【妻】 智恵子さん

共稼ぎの夫婦に與ふ

【夫】 山田舜一君

夫婦 和合 四ヶ條の掟

..... 四

このお蔭で危機を突破した...と

【妻】 松子さん

奥さんが童話作家で

【夫】 村岡敬三君

夫が出版屋さん!..... 五

その代り印税は胡麻化され通し

【妻】 花子さん

女房に食はせて貰ふ

【夫】 丹羽文雄君

氣持は憂鬱だった..... 五

日本酒ならまづ一升ウイスキーなら二本【妻】トミイのマダム

# 職業婦人を女房にもてば

讀賣新聞社婦人部編

ひと月振て夫婦が

## 撮影所で「ヤア」

タマには一緒に御飯が食べたい

【夫】 キヤメラマン 茂原英朗君

【妻】 蒲田女優 飯田蝶子さん

細君は蒲田の幹部女優飯田蝶子さん夫君は同じ蒲田のキヤメラマン茂原英朗君、二人は協同経営で藝妓屋「濱つたや」をやつてゐる。

先づ茂原君に、蝶子さんのカメラを廻す時の氣持をきいて見る。

「氣苦勞が多くて仕事やりにくいですネ。他人だと無關心にテキパキやれる事でも、女房となるとさうはゆきません。感情が入ります。徹夜の撮影が続いて、疲れ切つてゐる女房を見るとキヤメラを廻す手も鈍ります。また少しでもよく撮影したいといふ慾が自然出て來ます」

茂原さん大いに夫婦愛を示す。

「普通の家庭で想像もつかないやうなことはありませんか」

「さア、一緒に撮影してゐる時は別ですが、さういふことばかりはありませんから別々の仕事の時は一ヶ月も會はないことがよくあります、例へば私が夜の撮影にかゝつてゐて、飯田は晝の仕事といふやうな時は私が朝歸つて來ると飯田は出かけて留守ですし、夕方私が出かけた後に飯田が歸つて來るといふことになるのです。偶に會ふとすれば撮影所でバツタリ會つて「ヤア」と聲をかける位のもの、こんなことは普通の御家庭にはないことでせう」

「家庭の仕事はどうなさるのですか」

「全部女中まかせです。十年も一緒にゐるあたしにとっては母親のやうな女中です」

「茂原さんに何か不満はありませんか」

「茂原は御飯をたべる時間も惜しいやうに研究に没頭してゐますし、あたしはあたしで丈夫な時は撮影で少しのヒマもありませんから、一緒に銀ブラをしたり、映畫を見たりする時間が殆どありません、タマには外で一緒に食事位とりたいのですが、それさへ出來ないのが不満といへば不満でせうか」

「お仕事が女優ですから、家庭でもいろ／＼なポーズができて夫婦生活の倦怠といふことはないでせう」

「そんな自分をいつはるやうな芝居はできませんワ。撮影中は兎に角、せめて家庭にゐる時ぐらゐ本當の自分で生きたいといふのがあたしの氣持です」

「或る人は細君の収入がふえて來るとどうも細君が威張り出すといひますが、お宅では如何ですか」

こゝで蝶子さんの身振りまじりの大氣焔が始まる。

「そりア昔風に考へれば威張る様にも見えるでせうがもと／＼男つてものが圖々しいんですよ。朝は旦那さんがお眼覚めだと洗面の用意をして、ソバからサアお楊枝、サアお手拭と（十分いろ

氣を含めたシグサよろしく)やればいゝのでせうし、また夜おやすみの時は、寝巻をあたゝめてそれも自分の肌であたゝめて(シツかり抱いてあたゝめる真似をする)お待ちするといふことにすれば男は満足なのでせう。更に良人が午前の三時まで仕事をしてゐれば、妻はその傍で針仕事でもしながら、良人の寝るまで起きてゐるとすれば申し分ありませんが、翌朝早くから仕事を待つ妻にそんなことができませんので、良人だつてそんなことは要求しないでせうし、今の娘さん達はたとひ仕事を持たなくとも、そんな馬鹿な真似はしないでせう」

男を二人前に置いて蝶子さんの男子罵倒論は縷々として盡きません。

「副業としての藝者家は骨ではありませんか」

「以前待合をして居りましたがこれは現金の出し入れがありますのでどうしてもあたしがゐないと、うまくゆきませんが、藝者家の方は月末勘定ですから女中まかせでも結構できます」

「儲かりますか」

「不景気でダメです」

退却間際に少しイヤなことをきいて見た。

「役者にトシはないといひますが、あなたはおいくのす」

「そんなこときくもんぢやありません」  
果して叱られてしまった。茂原君は自分がカメラを廻すだけに、人からうつされるのがトテモつらいといふ。

### 西と東に街を流す

## 夫婦チンドン屋

但し旅先では存分に惚ろける

【夫】 伊藤吉二郎君  
【妻】 つかささん

記者は雨の降るのを待ったチンドン夫婦は雨が降らないと家にはゐないのである。チンドン屋さんの親分は浅草松葉町にゐる。日の丸の寅さんこと齋藤寅吉さんといふのがそれだ。ここから紹介されて夫婦チンドン伊東吉二郎君とつかささんに會ふ。

「御夫婦のチンドン屋さんは工合の悪いことがありますか」

「あるねエ、夫婦と知れると人氣が落ちる。川崎弘子だつてさうだらう。蘭童てエものが知れてからよくない。あれと同じだ」

伊東君、女房を映畫女優と見立てたところ自信もソートーなものである。

「だから一緒の時でも夫婦らしい顔はしないわネエ」

つかさん負けずに川崎弘子の様なシナをつくる。

「別々のこともあるのですか」

「その方が多い。取り合せてネエ。どうしても女の方が少いから、三人の註文なら一人が女といつた工合。女ばかりなんて註文の時は、ほかから借りて來なキヤいけないから日當も高くつく」  
チンドン屋さんだつて仕事となればつがひ離れぬをし鳥の仲をさかれて、東と西に働かなければならぬらしい。

うき世はつらいものである。

「アカの他人ならいくらふざけ散らしても、よろこぶものはあつても文句をいふものはありませんが、それが亭主となればつい遠慮も出てそれほど馬鹿さわぎもできません。そんなことで歸つ

てから叱られることもよくあります」

奥さんチンドンは御亭主チンドンの方を氣にしながらかういふのである。

「併し、一週間十日ときつて旅に出ることがある。地方へ頼まれて行くんだネ。そんな時は、すなほに夫婦だといつちまつた方が便利なこともある。夫婦ときまりアひとつ床に寝ても文句をいふものもないが、なまじかくすと費用がかさんでたまらない」

成程道によつてむづかしいものだと感じる。

「イヤなことは……？」

「自分の住んでる近所を廻るのはイヤだネ。てれる。餘り馬鹿ふざけもできないし、あツ△△のをぢさんとをばさんだアといはれれば、もオ機先をくじかれてしまふネ。チンドン屋が葬式の様になつたんぢアおしまひだ」

そしてチンドン夫婦は自分の家の近くへ來ると、鳴物の音まで細くかすれて、こつそり裏通りを素通りしてしまふのである。その代り一步町内を出はづれると、ヤケに大きくチン／＼ドン／＼ブツブツとやるのである。

「どんな仕事がつらいですか」



「チンドン屋なんでもものは氣分に生きるものです。頼んだ方の氣分がよければ仕事は實に愉快なものだ。例へば朝店へゆくとする。こつちで

「イオー大將おはやうがす」とやつた時にあつちでも

「ヒアー御苦勞」

と来れば（手を肩から頭へ擧げて大きな身振りをする）その日いちんち愉快に仕事ができる。ところが初手からニガ虫をつぶした様な顔をされたんでは一日くさつてしまふ、當節は何も競争で氣分のいゝ時は一時間か二時間位店の前でサービスをやつてくることにもなる」

チンドン屋は氣分に生きる街の詩人である。

「収入はどの位あります」

「一日一人二圓。チンドン屋の出来たてには一人一日十五圓から二十圓かせいだことも珍しくなかつた。もつとも需要も少なくなつたがネ」

「修業期間はどの位かゝりますか」

「藝の修業はどんな藝でもその日くが修業だ。生涯これでいいといふことはない」

チンドン屋夫婦から名優の心意氣をきくのはうれしい。

「まあ、外へ出られるまでに三ヶ月はかゝる。先頃東劇の囃し方に教へたが、専門家でもすぐには覚えなかつた」

「子供チンドンはどうですか」

「警察がやかましくてネ。子供は仲間の家にあづけて行く」

親と子が色とりくの衣裳に身を包み、子供を先に立て、街から街へ流してゆく様は、空想したゞけでも涙を誘ふユーモアではある。

### 私が癩癩起しても

良人は 怒らず 暖簾と腕押し

収入は一緒にして搔き混ぜる

【夫】 東洋海運社員 横田洋一君  
【妻】 聲樂家 四家文子さん

このお二人の中には、まだ生れて一年にもならない坊ちゃんがある。そしてすべての幸福はこの二世を軸として廻る風車——といふ風景畫は、誠に見るものの眼にまでなごやかな微笑を誘ひだす。先づ横田さんに——「音楽家を妻としてよかつたなア」——と思ふことから話して頂く。

「何よりも音楽趣味の養はれることです、以前から嫌ひではありませんでした、文子と結婚してから益す耳がこえて來ました。夕方疲れて歸つても、夕食の後で自分の好きな曲を歌つて貰へば自然疲れも治ります」

枕もとで妻の歌ふ唄をきながら夢の國へ送られてゆく横田さんを不眠症の記者は「イイナア」と思ふのである。

そこで今度は——「海運會社の社員を夫に持つてよかつた」——と思ふことを文子さんにきく

「アメリカ航路ですから、おいしい果物を澤山頂けることは何よりですワ」

記者は文子さんの聲のいいのはサンキストのオレンヂのおかげかも知れないと考へる、次にお子さんの出後た後と、それ以前との家庭異變を話して頂く

「僕は以前から夕食を外でたべることが嫌ひでしたが、子供が出來てから特に歸りを急ぐやうになりました、會社で叱られてクサク／＼してゐても、一度無心の子供の顔を見れば忽ち太陽の前の

霧の様に何もかも消えてしまひます。子供はいいものです玄關のベルの押し方で僕の歸つたことが分る様になつてゐますから、直ぐ文子が抱いて出て來る、この一瞬ほど家庭の有難味を感じることはありません。このよるこびがあるために到底街で夜ふかしをする氣にはなりません。子供が出來てから仕事にも張り合ひが出來てきました」

天下の不良なる夫よ。早く子供をお作りなサイ。「中間搾取者」であるところのカフェーも、麻雀莊も没落してしまふでせう。

「何か結婚生活に不満はありませんか」

「私はわがままに育つたものですから、獨りの時から見れば確かに束縛されますネ。ブラリと散歩したいと思ふ時でも出られませんが、演奏會へも以前ほど出なくなりましたし、演奏旅行なども数を減らすやうになりました。家庭を持っては併し致し方のないことでせう。また惹には横田がもつと音楽に精通し、語學に堪能であつてくれたら、仕事の上で随分援けて貰へると思ふのですが、これも私の慾張りでせう。便利な點といへば、音楽家の生活などは不規則なもので、寝る時間、起きる時間は獨りの時と随分ルーズでしたが、結婚してキッチンとして來たのは會社勤めの夫を持つたおかげでせう」

今度は横田さんに

「奥さんがステージに立つことは？」

「僕はお互ひの自由を尊重したいと思ひますので何とも考へません」

と横田さん

「西條(八十)さんは、若し僕が君と結婚したと假定したら、僕はステージには立たせないネと私にいつたことがあります。大事にしまつて置くといふのでせう、併し横田は私のしたい様にさせてくれます」

「御夫婦が衝突するやうなことはありませんか」

「私は痲痺持ですからよく爆發させますが、横田が怒らないので暖簾と腕押しです。張合がなくて自然やめてしまひました」

「お小遣ひはどちらが餘計に遣ひますか」

「餘り遣ひませんネ。私の自動車代位のものです」

最後に御兩人の財政政策を質問すると、お二人は收入を一緒にして麻雀の様にザラ／＼とかきまぜるといふ、そして珍しくテヤクがつくとスキイに行つて轉んだり、ハイキングに行つて汗を

拭いたりするのださうな。ホーム・スキート・ホーム。

奥さんからいたゞく

主人の  
小遣は 一日五拾錢也

干涉するなら別れるーと奥さん

【夫】 畫商 上田博一君

【妻】 美容師 ロシー・上田さん

夫君を上、細君は下で仲よく共稼ぎをやつてゐるアメリカ生れの美容家、ロシー・上田さんをお訪ねすると、二階のアモレ畫廊へ案内された。「油繪にかこまれたる生活」の中で、畫商上田博一さんの話――

「妻も僕も全然自由にして、お互ひに干涉しないことにして居ります」

「仕事にまで干涉されたのでは堪りませんから別れるばかりです。よく仕事のこと二人が反對

意見を持つことがありますがさういふ時はどうしても衝突します」  
奥さんは強硬な態度を示す。

「書商は儲かりますか」

といふと奥さんが引き取つて

「儲かりませんよ、上田の商賣はいつも損ばかりして居りますから同じ損をするならキレイなものでして貰ひたいのです。繪は見てゐて悪い氣持は致しませんからね」  
益す辛辣になります。

「併しお二人で仕事をしていらつしやると面白いでせう」

「ちつとも面白くありませんワあたしは家にゐたいのです」

「家にゐるとしたら何をなさいますか。料理や裁縫でも……」

「そんなものは女中が居りますから致しませんワ。洗濯でもアイロンでも宅では全部電氣ですから、さういふものに手はかかりません。それよりはゴルフをしたり、ダンスをしたり、お芝居へ行つたり、香氣に遊んでゐたいのです。昔は多少財産もありましたから随分贅澤をしたのですが、もう一度さういふ贅澤がして見たいと思ひます。それにはお金が必要ですから働いてゐるの

です。お金さへあつたら仕事はすぐやめてしまひます、實際同じ仕事を三年つゞけるとアキますネ。新しいうちには興味もありますから一生懸命にもなりますが」

「かういふ奥さんを持つたら、旦那さんは破産してしまひますネ」

「たまりませんよ、自分で稼いだものだけは何に使つても文句はありませんが、それでなかつたらどうも……」

「現在財産は全部あたしの名義にしてあります、それでなかつたら不安で堪りませんからネ」

「不安といふと上田さんに新しい愛人ができるとか……」

「またいつ死ぬかもわかりませんからネ、ハッハッハッ」

上田さんは笑つて見せます。

「上田はクニに財産があるのですが、損ばかりしてゐるものですから、兄弟が管理してゐるのです」

「僕は金銭には至つて淡泊の方でしてネ」

「毎日あたしがお小遣をあげるのです」

「いくら位お小遣をつかひますか」

「一日五十銭」

「僕は煙草も酒もみませんから金はいらないのです」

「上田はコマ／＼したものを買ふのが好きなのです」

「大きな御婦人なんか買はれたらお困りでせう」

笑ひ

「お子さんは？」

「男の子が二人、上が十七で下が十一になりますが、面白いものですネ。私共が贅澤をしてゐた時に出来た子は全くお大名で入學試験を受けても白紙の答案を出しますし、自分の財産を持つてゐますから、散歩にゆく様なつもりで先頃アメリカへ行つて来ました。一ヶ月もゐたでせうか、あちらはつまらないといふのでヒョッコリ歸つて来てしまひました。その子とは反對に私が職業を持つ様になつてから出来た子はやはり打算的です、環境が影響するのですネ」

「お子さんは女中さんまかせですか」

「始終おもてに出て遊んで居ります。それに今試験準備で私塾へ通つて居りますので」

## 新橋驛で夫婦がー

### 坊やのリレー

妻子の留守の家庭は寂しい

【夫】 中央卸賣市場機械技師 三上 潔君

【妻】 舞踊師匠 藤蔭桃枝さん

東京市の胃袋——中央卸賣市場の機械設備を一手に引きうけてゐる三上さんは魚と野菜の間を縫ひながら、冷蔵庫とモーター室の間を往復してゐる。

「結婚するまでは二人共からだが弱くてよく病氣したのですが、結婚と同時に子供が生まれ、五年になります。三人共一度も病氣をしたことがありません。氣持ですネ。皆が緊張して仕事をし、てゐれば病氣のつけないスキがないのでせう。また事實誰か一人でも病氣をされたらそれこそ忽ち困つてしまひます」

三上さんは仕事服を脱いで額の汗を拭く。記者は世の中の有閑マダムに病人の多いのは、緊張してあたるべき仕事がないためだと考へる。

「お子さんは女中任せですか」

「いえ、どちらか必ず親がついてゐるといふ方針をとつて居ります。妻は出稽古が多いので子供も一緒に連れてゆきます」

「何だかワケの分らない歌をうたひながらお稽古を見て居ります」

奥さんが説明する

「ではさだめし踊りがお上手でせう」

「ところがチツとも覚えようともしませんし、また教へようとも致しません。三上に似て機械いぢりの方が好きなやうです」

「土曜日は僕が半日だものですから、新橋驛で子供の受けつぎをやります。土曜でなくとも妻が夜おそくなる様な時は、やはり新橋驛で受けとりませう、まるでレー競走をやつてゐる様で子供も新橋驛に來れば、マ、の手からバ、の手へ渡るものと覺悟をしてゐるらしいのです」

お子さんの驛傳競走も共稼ぎの御家庭らしくホホゑましい風景ではありませんか。

「奥さんが踊りをなさると楽しみも多いと思ひますが」

「僕が讀んだ本の梗概を話すと妻がそれに振付けをするといふ様な楽しみはあります。その代り新作發表會などの時は、鳴物や小屋の交渉からすべて事務的のことは僕が仰せつかります。なか／＼大變です」

夫唱婦和の一場面

「まだお手傳ひすることはありませんか」

「朝の掃除です。之はうちちうが分擔してやりますから實に早くできます」

「中央市場にいらつしやれば食糧品の仕入れには便利でせう」

「ところが事務所にゐる人は誰も買つて歸らないやうですネ、たまに鶏肉を買ふ位のもので」

「奥さんが働いて一番不便なのはどういふ點ですか」

「僕の歸りは五時半頃ですが、妻の歸りはどうしても七時半頃になりますから、家に入つた時子供も妻もゐないのが何んとなく寂しい氣が致します。殊に舞臺などあつて時間に狂ひの來た場合例へば三時といふ約束が二時になつたり、四時になつたりした場合、子の引きつきも豫定通りゆかないので随分癪にさはることがあります。子供が一人舞臺裏に抛り出されてゐるのを見た時な

んか全くたまりません。喧嘩もかういふ時に起るのです」

「若しお子さんがなかつたとしたら？」

「やはりあつた方がいゝと思ひます。夫婦がいつまでも友達のやうで仕事に精も出ませんし、緊張も缺けませう。無理をしながらやりくりしてゆくところに家庭の妙味があるのではないでせうか」

「奥さんは何か御希望はありますか」

「踊りは随分はげしい労働ですから、よく喰べ、よく眠るのが何よりですワ」  
ではおやすみなさい。

## 時間は別々子供はなし

### 私—寂しいです

—とヌルマ湯國際結婚のご夫婦—

【夫】 慶大講師 ボール・ケート君

【妻】 洋裁家 マス・ケートさん

洋裁店フアツシヨン・シヨツブの女主人公マス・ケートさんは、また慶應その他に講師をやつてゐるボール・ケートさんの良妻である。

「世間には外國人と結婚して失敗する人が多い様ですがあなたのところは……」

「至極無事だといふのも、ボールは半分日本人みたいだし、私は半人西洋人みたいだから丁度よく調和がとれるのでせう。實際私が若し日本人と結婚してゐたら必ず失敗してゐたと思ふワ調子はづれだから勤まりツこないんですもの。たとひ夫が承知しても親類とか老人とか承知しないでせうからすぐ追ひ出されるにきまつてるワ。併し若し二人が純粹の異國人同士だつたら之も必ず失敗するでせうネ。若いうちはいゝけれど、老人になるとどんなに永く外國で暮した人でもドテラが着たくなつたり、疊の上に坐りたくなるでせうし、私だつて今に丸鬘に結つて和服を着たくなるかも知れないワ、私達と同年輩の人で中途から洋服を着だした人は今みんな和服に歸つてゐますものネ」

「お二人は戀愛結婚ですか」

「いゝえ、極く月並な見合ひ結婚だワ。私戀愛結婚には反對よ戀愛なんてものはいつ迄もつゞくもんぢやないし、覺めた時にはあきるといふことになるでせう。またさういつまでもあつくちや

やり切れないしネ。ところが見合ひ結婚といふのは最初から熱くも冷くもないんだから又ルマ湯へ入つた様なもので、あきるといふ心配はないでしよ。かといつて全然きらひなものなら見合ひの時に断りするまでのことだワ、私ポール好きよ。ポールも私を好きなの、でも戀愛なんて激しいものぢやなくつて、友情といふ程度の好きだワネ」

「御家族は？」

「私の母に女中に犬が一匹、それに私達二人。でもみんな部屋は別々よ」

「お母さんには不満はありませんか」

「ないワ。私兄弟が多いんだけど女は私一人なのよ。だからとても母と仲がいいの。頗るの善良でね。ポールが病氣しても私より大事に看病するワ。併し若し働いてゐなかつたら母だつて居づらいでせうし、ポールだつて厄介ものにするかも知れないと思ふワ」

そこへポールさんが入つて来る

「ねえ、ポール何か私に不満あるかつて？」

「ポールさん突然なので恥かしさうにして答へない、やがて

「一緒にゐる時間すくないですからネエ。それに子供がありませんから、家庭の雰囲気らしいも

の見られませんかからネエ」

「實際顔を合せない日が多いんですからネ。私が歸る時はポールは寝てゐるし私の寝てゐるうちにポールは出かけてしまふんですもの。ポールは朝乗馬をやるので七時には家を出てしまふのヨこの頃でこそ店を持つたから店へ時々寄るけれど、以前白木屋にゐた頃は殆んど會ふ機會はなかつたワ」

「ポールのシャツはマスさんが作るのですか」

「いいえ、部屋着や寝衣ぐらゐ作りますけど、それもかためて一度に澤山作つておくの」

「食事はどなたが作りますか」

「母が監督して女中が作るワ。ポールは菜食主義でお酒も煙草ものもないピュリタンよ。私も此頃は菜食主義なの。肉食をする人には癌が多いといふワネ」

「經濟方面は？」

「私は計算のできない人間だから母まかせよ。二人で稼いだのを全部母にまかせてポールと私はお小遣を貰ふの」

「お子さんは作らないのですか」



「からだが弱いからできないのヨ。もうその位にして頂戴。あんまりひやかされると困るワ」  
 マスさんはイヤ／＼をします。

### 男性無能を論ずる

## 社長もまた女？

出がけに夫へ……「行つて参ります！」

【夫】 前 府 會 議 員 日比勘三郎君

【妻】 惠那ラヂューム社長 惠美子さん

資本金百萬圓の女ばかりの株式會社「惠那ラヂューム」の女社長さんは、どんなに大きくてコハい  
 をばさんだらうか。雨に濡れる庭を見ながら應接間で待つことシバシバ——先づ女社長日比勘三郎君が  
 登場、髪を七三に結つてお白粉をやゝ濃いめにつけ、黒の紋付を一着に及んだところ何の變哲  
 もない、道で會つたらたゞの奥さんと思へないだらう。



「面會はすべて事務所の方ですることになつて居りますが、今日は少し気分がすぐれませんので  
 偶然宅に居りました」

まるで本當の社長みたいなことをいふ、そこへ色の黒い野人日比勘三郎氏登場、嘗つて府會議員を  
 やつてゐただけあつて豪傑笑ひがうまい。

「奥さんが家にいらつしやらないと不便ではありませんか」

「ハツハツ皆にさういはれますが、私は學生時代に結婚してその頃は飯もよそつて貰つたもので  
 す。併し世の中へ出てからはすべて女中まかせでしたのでその習慣がついたせゐか少しも不便を  
 感じませんよハツハツ……」

「奥さん、社長の椅子の坐り心地はどうですか」

「席のあたゝまるヒマもなく、朝から晩まで飛び廻つて居ります。先月末は午前二時まで働きた  
 ましたが、運轉手の方がまゐつてしまつて、奥さんには敵はないと悲鳴をあげたほどです。丸ビ  
 ルでも一番おそくまで灯のついてゐるのは私の事務所だけでせう」  
 社長さは精力家でゐらつしやる

「何か精力劑でもお用びになりますか」

「それがあなたラヂウムで……」

早速出た。

「このお茶にもラヂウムが……」

と卓の上を指す、飯んで見たら豆茶の様な味がした。

「社員に月給袋を渡す時はどんな氣持です」

「悪くありませんネ」

うれしさうだ。

「社員のクビを切つた経緯はありますか」

「ありません」

儼然といふ。

「縁あつて来たものです。仕事のできないのは自分の導きかたが悪いのですから、部署を變へる

とか教へるとかして進んでゐます」

眼を細くして、社長らしい温情を示す。

「男の事業家はよく待合政策を用ひたり、第二號を置いたりしますが社長は如何です」

「女の仕事はお酒も飲みませんし、お茶で片がつきますから時間と費用の浪費が省けて實に能率があがります。男が三年でやる仕事を私なら一年で片づけてしまふ自信があります」

すばらしい勢ひだ。

「それでは随分儲かるでせうが儲けたおカネは何に使ひます」

「社會事業に使ひます、そのために『健康母の會』の會長もやつて居ります」

「美人の秘書は置きたくありませんか」

「置きたいのですが、女は時間にはばられますから私について来るやうな秘書は却々ありません」

だから美少年の秘書を置かうとはいはなかつた。「女ばかり……」の手前かも知れない。

「社長、世の中に怖いものはありませんか」

「眞心と信念とを以て進めば何も怖いものはありません」

この邊から油が乗つて演説口調になる。

「國家のため社會のために健康な母を作りたいといふのに誰が反對致しませう。併し私の仕事に

賛成下さらない方があつても少しも怒りません、それは私の眞心がまだ足りないからと思ふからです。ところがちよつとでも眞心に反いたと意識した場合は、一寸先も怖くて進めません第一あなた方が黙つて居りますまい。その意味で新聞社の方が一番怖いと思ひます」

「御主人は怖くありませんか」

「怖くはありませんが叱られることはよくあります」

「どんな時に叱られます」

こゝで日比さん膝を乗り出す。

「大體女といふものは常識がありませんナア。大臣の前でも誰の前でもシャア／＼と出かけるのですからナア。我々にはとて出来ません」

日比さん府會議員らしい口吻を漏らす。

「私は寧ろ常識があればこそ出来るのだと思ひます。國家のために盡すのに大臣が援助しないワケがありますまい」

御夫婦の雲行き少し荒くなる。

「併し、社長を奥さんにしていらつしやるとたんまり配當があるでせう」

「いやまだそこまで行きません」

「今のお仕事は？」

「工場の方を受持つてゐます」

「お子さんには別に不満はありませんか」

「今入學試験で家庭教師にまかせ切りです。時々社長にお小遣をねだつてゐる様ですが」

そこへ社長御出勤の自動車が出来た、すると社長はシトヤカに

「いつてまゐります」

と日比さんにお辭儀をした。社長もまた女であり、人の妻であつたのだ。

## 月に一度の逢瀬で

## いつとも新婚氣分

マドロス夫婦に喧嘩の種なし

【夫】 川崎汽船一等運轉士 谷口二郎君

【妻】 體操 教師 光子さん

魚を陸でつかまへるのがむづかしい様に、マドロスと陸で會ふのもむづかしい。一ヶ月に一日の逢ふ瀬は一年一夜のたなばた様とちがふけれど、マドロスの家庭生活は一生に一體いく日數へられることであらう。太平洋の潮風で磨きあげた谷口さんは陸上の生活を俗界と呼ぶ。

「月と星と水にかこまれた海の生活は、女をまじへぬ清淨高野山の様なものです、若い時には港々の女に妄念も走りましたが、我々の年配になりますと煩惱の火も消えて少しの迷ひもありません、一ヶ月一日の歸宅も港についてから仕事の整理をして歸ると夜になります、そして翌朝はまた早く船へ行かなければなりませんからホンの泊るだけ、夫婦喧嘩なんかしてゐるヒマはありません」

「長く一緒にゐればこそ奥さんの缺點も見えて来るワケでせうから、始終奥さんは天使の様に見えるでせう」

「さうでもありませんが、一月を一日に壓縮した我々の生活は或る意味で幸福だと思ひます。情勢で送ればこそ夫婦生活の倦怠もありませんが、我々の生活は生涯あきるところまでゆかないのです」

「奥さんはさびしくありませんか」

「子供のないうちは随分寂しいと思ひましたが、子供ができてからはそれほどと思ひませんそれに晝間は仕事を持つて居りますから」

奥さんは東京聖嘔學校に體操を教へていらつしやる。

「マドロスの妻が夫の留守中にいろ／＼な問題を起すといふことはよくきゝますが、事實神戸などには船員の妻を専門にしてゐる誘拐者が居ります。併し誘拐される方にもスキがあるからで、そこへゆくと仕事を持つてゐればただブラ／＼遊んでゐると違つて、心のスキも少いワケです。妻の職業はこの意味も大分手傳つてゐるのです。それに就いても我が國の一般が職業婦人を遇する道を誤つてゐると思ひます」

「どういふ點ですか」

「教員だけに就いて見ても、結婚するとイヤがりますし、子供でも出来れば益す敬遠します。或る學校では結婚と同時に辭めて貰ふことになつてゐる所さへある位で、これは教育事業を純營利

事業と考へてゐるからです。子供の経験のない人間に子供の教育ができませんか。この點は妻の學校は校長が實によく理解してくれまますので助かります。家も近所なので休みの時間には時々家へ歸つて子供の世話もできます」

「長い休暇はないのですか」

「船の修理をする時が一番長く陸にゐられる時で、一週間から時には二週間位、さういふ時には臨時に家庭を移動します、先日も瀬戸内海の或る島に移動しましたが、釣りは出来る、ボートは漕げる、久しぶりで新婚気分を満喫しました、到底都會人の避暑なんか及びもつかぬバラダイスです、またよくしたもので、港町には船員専門の貸家があり、炊事道具も夜具も全部貸してくれます、學校でも休暇を臨時にくれますので感謝してゐます、何しろ船を離れることができませんので、妻の方から来て貰ふより致し方ありません」

「奥さんマドロスを夫に持つと珍しいお土産が澤山あるでせう」

「なか／＼さうもゆきませんがたゞで上海、香港あたりまでの航海ができるのは役徳かも知れません、あの蓄音器もお土産です」

と大きな蓄音器の方を向く。

「お子さんができると航海中も心配でせう」

「若いうちは宗教など馬鹿にしてゐましたが、何しろ大自然の中に居りますと人間の弱小ことがよく分り、この頃では八卦に凝つて居ります、これで大概の豫想はつきまますし、子供の生れる時も、太平洋の上で生れる日と男か女かをあてました」

「では陸で奥さんが何をしていたらつしやるかハッキリ分りますね」

「分りますとも」

「奥さん油断なりませんゾ」

「なか／＼なのねハツハツハ」

谷口さんは海の上でする様な大きな笑ひを笑つた。

あすの日を樂しみに

## 詩人とマネキン嬢

物質と心を交換しながら！

【夫】 詩 人 丸 山 薫 君

【妻】 東京マネキン 三 四 子 さ ん

東京マネキン丸山三四子さんの公休日をねらつて、そのアパートにお訪ねする。夫君は詩人丸山薫氏、マネキン名は夫君の名をそのまゝとつて「梅本薫」と名のるほど、善良にして貞淑なる世話女房です。久しぶりの公休を浴衣にくつろいで、イソイソと立ち働く姿を記者は羨ましいと思ひます。

「もう覺悟をきめてゐますから何なりときいて下さる」

大兵十九貫の丸山氏はドツカリ洋服であぐらをかきます。狙上の鯉にしては料理すべく餘りに大きすぎる。

「お子さんは作らないのですかできないのですか」

「できないのです」

ハツキリいふ。

「そりゃいけませんネ」

「いけませんといふ表現はいいナア」

文字で苦勞してゐる詩人らしい感慨をもらしながら傍の愛妻を顧みる。愛妻は笑つて答へません。

「子供があると仕事に拍車をかけられて、緊張もすれば精も出るといひますがどうです」

「友人なんどもさういひます、殊に男の子の場合」

「併し、お子さんがないと呑気でせう」

「氣はラクですネ、夫婦の間に子供がないと、家庭といふより友達が一緒にゐるといふ氣持です友人が訪れて來ても初めは呑氣でいゝなアといひますが、暫くたつてから「併し」とつけ加へますネ。何となく物足りないでせう」

「子供は家庭の軸みたいなのですネ」

「でも子供があつたら働けないでせうネ」

三四子さんは、心配さうに夫君を仰ぐ。

「無理を何とか切抜けてゆく所に家庭の妙味はあるのでせう」

「子供ができたら僕も散文を書くかも知れないアハツハツ」

十年一日の如く、詩以外は何も書かないといふ純粹な丸山さんは、報いられない生活を、顧みて自

嘲的にかういふのです。

「詩の収入はどう位です」

「一流雑誌で一篇二十四、單行本を出しても三百部位のもので、併し絶望はしません。やがて詩で生活できる日の来ることを確信してゐます」

シツカリといふ。三四子あんも頼もしさうに

「その時はマネキンをやめますワ。實際結婚した當時は職業夫人になるなんて夢にも考へて居りませんでしたもの」

「どういふ動機からマネキンを選んだのですか」

「友人の紹介で……」

「初め女房を公衆の面前に立たせることに就いては随分不安も抱き、煩悶もしました」

「人にとられるといふ様な……」

「それもありましたし、新職業としてのマネキンを、社會は一種輕蔑の眼を以て見て居りましたから、それから受ける精神的屈辱を感じないワケにゆかなかつたのです。今は立派な職業として認められましたから何とも思ひませんが」

「平均収入はどの位です」

「百圓から百五十圓位、初めた當度は二百圓位になりました」

これは奥さん。

「住宅問題としてのアパート生活は？」

「隣近所のつき合ひもないし、押し賣りも來ないし、閉めて出かけるには便利ですが、この生活がいいか悪いかといふことになる問題だと思ひます。例へば友人を訪ねて、縁側から立ちのぼる土の香をかいだり、緑の葉を透して來る日光を見たりすると、自然から全く切り離されたアパートの生活がイヤになることもあります、兎に角最小限度の生活ですから氣持にもニトリがなく窮屈でいけませんネ」

「食糧の買ひ出しは丸出さんの役ですか」

「免ゝたまにはゆくこともあります」

と困つたやうな表情をして

「これは書かんといて下さい、新聞のタネにはこういふ所がいゝんだよ。ハツハツハ」と頭をかきながら奥さんを横眼に見る。みなサン茲で「玉葱を運搬する詩人」を想像して下さい。

「奥さんが留守で不便ではありませんか」

「僕は午前中仕事をしますから却つて便利です。女房がゐたのでは仕事ができせん」  
かくして詩人とマネキン嬢とは、物質と精神とを交換しながら、アパートの二階で成長してゆくのである。

### 妻は看護婦代りに

### 良人 ホテルの帳場

夫婦喧嘩は絶え間がない！

【夫】 外科婦人科醫 相馬 求平君

【妻】 ホテル・ベニスのマダム みえ子 さん

細君はイロエロな意味で有名なホテル・ベニスを経営し、夫君は外科、婦人科の開業醫相馬求平氏。この二人の猛者に取り囲まれた記者は受け太刀である。サア何でも来いといふ身がまへに、こ

つちも勇氣を奮ひ起して夫婦喧嘩からきいて見た。

「始終ですワ。何しろ私は九州生れのドンキホーテで、相馬は北海道生れの科學者と來てゐるのですから性格は全く反對ですだから年ぢう衝突ばかりしてゐます。たとへば映畫を見に行つても歸りの車では二人共別々のことを考へながら、一人は一方の窓から、他の一方は片方の窓から外を見て口もきかないといふ有様です。私はお酒を飲みますが相馬は少しも飲みません。飲めば子供に泣いたりわめいたりする私ですがその時の姿こそ私の本當の姿ではないかと思ふことがよくあります。先日も銀座でおそくまで飲んで居りますと、いつの間にか相馬は歸つてしまつたのです。サア癪にさはつてその晩は大亂闘をやりました」

マダムは眼をつり上げて相馬さんを睨む。

「いつも僕がお守り役なので、時々さういふことをやらないとクセになります」

相馬さんは笑つてゐる。

「併し夫婦といふものは性格の反對な方がよくはないでせうか互ひに牽制し合ひ、互ひに自分がないものを生かし合つて初めて幸福な家庭ができると思ひます。喧嘩をするたびに愛の結び目は



強く深くなつてゆく様な気が致します。二人の反対な性格の間に出来る子供はきつと兩方の良い所を所せたよい子だと信じます」

「お子さんは？」

「まだありません」

「婦人科の名醫がついてゐても？」

「でも自分の子に拘泥する様ではまだダメだと思ひます。廣く人類の子を愛する様にならなければ……」

「キリストの様に……」

「ホツホツホ」

と笑つて

「本當は子供の出来ない私の負けをしみです」

と軽く肩をぬく話術の妙も心得たもの。

「ホテル業は賛成ですか」

と今度は相馬さんにきいてみる。

「水商賣といひますが、商賣に上下はないというのが私の考へです一ばん自分の好きなものへ向ふのがよいと思ひます」

「ホテルをやつてゐて何か便利なことはありませんか」

「洗濯人や料理人が居りますからさういふ仕事から全く解放されるワケです」

「夫婦生活は亂脈になりはしませんか」

「ところが反対です。ホテルをして居りますといろ／＼な人間のさま／＼な醜い方面を見せられますから、あさましいと思ひ私共の性生活は眞面目なものとなります。いたつてその點は圓滿なものです」

御兩人顔見合せてイミシンな笑ひ

「利益の分配はどうなります」

「私が皆あづかつて相馬にはお小遣ひを渡します。ですから財布にはいつも五圓位しか入つて居りません」

「ドンキホーテに財政をまかすのは危険ですネエ」

「いや僕が監督しますから大丈夫です。實際この人は計畫はうまいのですが、後は放漫政策で締

くゝりがないので困ります」

「お互ひに仕事を助け合ふ様なことはありませんか」

「あります。病院は晝、ホテルは夜ですから、その點は實に都合がよいのです。病院の忙しい時は看護婦の手傳ひもしますしホテルの忙しい時は相馬に帳場を手傳つて貰ふことも珍らしくありません」

### 妻の留守には亭主が

### 皿洗 洗濯もする覺悟 ひも

亭主づらでは共稼ぎ不可能！

【夫】 建築家 鷺塚誠一君

【妻】 女教師 智恵子さん

夫君は米國で仕あげた建築家、鷺塚誠一氏、細君はアメリカ生れで現在目黒のアメリカン・スク

ールに教鞭を執つてゐる先生、このお二人には今年八ツになるアメリカ生れのお嬢さんがゐる

「アメリカ流の共稼ぎ秘訣を教へて下さい」とやつて見た。

「左様、夫婦共稼ぎには、その根柢として思ひ切つた生活の單純化が必要です。少しでもムダな勞力を省くやうに心がけなければ到底續くものでありません。これが一つ。次は亭主が亭主づらをしてゐる間は共稼ぎは不可能です。妻の留守には亭主が皿洗ひもするし洗濯もするといふ位の氣持ちがなければダメですこれが出来ないために、我が國の共稼ぎはうまくゆかないのではありませんか」

「あなたは如何です」

「洗ひますとも」

鷺塚さん腕をまくり、覺悟のほどを示す。

「お子さんは別に淋しがりませんか」

「小さい時からなれて居りますから、寝る時間が來れば獨りで自分の寢室へ入つて眠るといつた

調子です。併し女中まかせは何としても子供のためによくありませんから、將來は英語を教へるにしても洋裁を教へるにしても、自宅で出来るやうな仕事に移りたいと思ひます。その手はじめにこの夏は輕井澤で講習會をやつて見ようと考へて居ります」

これは奥さん。

「アメリカでは産兒制限が盛んだといひますが」

「一緒に働くには子供のない方が氣樂ですから、自然産制の必要も起つて來るのでせう。併し今の子供が兄弟を欲しがりますので、來年はも一人生まうと思ひます。それには私の経験からいつて春生れるやうにするのが一番よい。なぜなら、寒さに向ふより暑さに向ふ方が子供のためにもよし、また襦袢の洗濯もらくです」

驚塚さんは自分で襦袢を洗ふことを考へてかういはれたのかも知れない。

「アメリカに離婚の多い原因は？」

「お互ひが思ふことをボン／＼いひ合つて少しも遠慮といふことがないためと思ひます、それと二人が經濟的に獨立してゐる場合に殊に多いやうです」

奥さんがこれを受けて

「親類の母親達にきいて見ましても若し自分に生活するだけの力があたら必ず離婚してゐただらうと申します。男の横暴のために、妻は一生に必ず一度や二度は別れたいと思ふことはあるやうです。その時に併し、家庭を出たら早速明日から喰べられないといふ恐怖が仕方なしに家庭に縛りつけてしまふのでせう。子供のある場合にはなほ更この恐怖はひどいと思ひます」

そこで今度は驚塚さんが――

「我が國の家庭では子供を母親が獨占してしまふやうな傾向があるために、父親は愛の對象（母と同時に子）を失つたさびしさから浮氣をすることになり、家庭が素れるのではないでせうか子供は寧ろ父親のものだといふ風に母親がし向けたら、家庭悲劇の大部分は防げると思ひます「お父さんは今お仕事だからソバへ行つてはいけない」とか「お父さんの邪魔になるからこつちにいらずやい」とかいつて、子を父から離し、自分に近づけようとする母親の態度がいけないのです父がお守りもすれば散歩にも連れてゆくといふことになれば家庭も圓滿になると思ひます」

最後に職業婦人の理想を奥さんにきいて見る。

「我が國で普通に考へられてゐる女店員とか女事務員とかいふものは、本當の職業婦人ではないと思ひます、若さを賣り物にするのでなく、腕を賣り物にするには女でも矢張り四十を過ぎてか

らではないでせうか。米國あたりの新聞社には女の編輯長もゐますし、百貨店には仕入部長もゐますが昔中年を過ぎた人ばかりです。家庭の経験もあり子供を育てた経験もあつてこそ初めて女として根柢のある仕事ができるので、それにはどうしても四十を過ぎてからといふ事になりませう。我が國では雇ふ側にこの理解が缺けるのでせうか、それともエキスパートを志す婦人がゐないものでせうか」

記者は口の中で「人生は四十から」と繰返しながら社へ歸つた。

## 共稼ぎの夫婦に與ふ

### 夫婦 四ヶ條の掟 和合

このお蔭で危機を突破した……と

【夫】 白木屋商品部次長 山田舜一君

【妻】 毛糸編物講師 松子さん

「丁度田尻稻次郎さんが東京市長のころ「女も働け働け」と盛んにいはれたものです。それが動機となつて私の妻も働くことになりました。初め麻布にあつた家庭製作品獎勵會へ入り、次いでWCAの西洋人から本格的に毛糸編物を習つて愈々職業とすることになつたのですが、時機もよかつたのでせう。震災後で毛糸編物の歓迎された時でしたから忽ち引ばり尻で、お弟子は集る講習會へは呼ばれるといふ有様。収入もグン／＼とふえて行きましたが、それと正比例して家庭は幸福になつたかといふのにさうはゆきませんでした」

白木屋商品部次長山田舜一さんは此所まで話して紅茶を飲んだ。

「収入がふえて家庭が不幸になるのはどういふワケですか」

「理由はいろ／＼ありませうが第一は収入の増加と共に妻が威張り出す。これは不愉快なことです」

「あなたの収入より多かつたのですか」

「さうでもありませんが」

と笑つて

「事實私の知つてゐるタイピストで、収入がふえた爲に離婚した女があります。収入のためばか

りではないでせうが、収入の増加は往々かういふ危険にさらされる機会が多いと思ひます。次に私は朝八時に店へ出て夜八時頃でなければ帰宅致しませんから、殆んど妻と話をする機会もないのです。そこへ夜歸つても玄關に迎へる妻もなく一入淋しく女中の出した膳に坐るといふのでは全く家庭のあたりか味は感じられません、自然家へ歸るのもイヤになり、次第に家庭が破壊されてゆくのだと思ひます。これではいけないと気がつきましたので、それからは出来るだけ家庭で教へて貰ふこととし講習へば成るべく出ないといふ方針をとるやうになりました」

「其代り収入は減つたでせう」

「減りました、併し子供のない場合は兎に角、現在は子供が三人居りますから、どうしても子供への面倒を見ながら働くには家庭で出来ることでなければなりません。妻か外へ出て働くために子供との親しみがなくなり、愛が薄くなり、自然家庭が冷いものとなることは考へても恐ろしいことです」

そこで山田さんは夫婦共稼ぎの秘訣を個條書きにして下さる。

- 一、食事は家族打揃つて卓につくこと
- 二、主人の送り迎へは必ず妻がすること

三、子供達の面倒は妻が見ること

四、家事は出来るだけ他人に依頼せぬこと

「以上の四ヶ條を守つて、今日までどうやら不幸も見ずに参りました」といふのである

記者は以上の信條を携へて夫人である手藝家山田松子さんをお訪ねしたのである

「私共の若い頃とは考へ方がちがつて参りましたのに驚きます主人は赤ん坊の襁褓に手をふれるさへ男のすべきことではないと考へてゐたのですが、この頃の若い旦那さんは、赤ちやんを抱いて往來を歩いていらつしやいます。こんなことは想像もつたなかつたことです」

「婦人の職業に就いては？」

「職業にするしないは別として自活できるだけの職を身につけて置くといふことは必要だと思ひます、いつ主人に死別しないものでもなし、それでなくてもどんなことで離婚しなければならぬ様になるか、人の運命は制らぬものですから、その時になつて早速こまらぬ様な用意をして置くことはどなたにも必要なことと思ひます」

「収入がふえてあなたは威張りましたか」

「別に威張つた覚えはありませんが、主人から見ればさう思へたのかも知れません。併しどうも奥さんが餘りえらくなると家庭は面白くなくなるのではありませんか。奥さんのえらい方で離婚なさつたり、三角關係に陥つたりする方もよく見受けますから」

こゝで奥さんは二三の實例を挙げられる。そのために奥さんも餘りにえらくなることを見合せられたのかも知れない。

「お子さんの世話を全部奥さんにまかされるとありますが、これはどうでせうか」

「それは以前私が小學校の教員をしてゐたので安心してゐるのでありませう」

今日はお稽古日、玄關は下駄で埋まる繁昌ぶりである。

奥さんが童話作家で

夫が出版屋さん！

その代り印税は胡麻化され通し

【夫】 印刷兼出版業 村岡敬三君  
【妻】 花子さん

およそラヂオのある御家庭なら「村岡のをばさん」で通つてゐる「子供の新聞」の村岡花子さんも御主人が何をしていらつしやるかは餘り知る人がない。そこでお揃ひひの所へ押しかけて見る。

「たつた今『星の弟子』三版の序文を印刷所へ渡したばかりで……」  
と花子さんはいふ。

「印刷所はどこですか」

「こゝです」

と夫君へ眼を向ける。うかゞつて見ると夫君が青蘭社といふ出版兼印刷所を経営し、そこから奥さんの著書を次から次へ出すといふ至極便利な共稼ぎ振りである。つまり著者と本屋さんと同棲してゐると思へば間違ひはない。

「印税の拂ひはいゝですか」

「ところがよく胡麻化されてしまふのですヨ。何しろ夫婦の間で検印を捺すでもなし、いくら賣

れていくら儲かつたのか少しも分らないのですから」

そこで引く手あまたの著者は夫君には内證でこつそり他の本屋から出すことにもなるのである。

「この奥さんの浮気はおほ目に見えますか」

「どうも仕方がないですなアハツ、ハ、ハ、」

村岡さんは笑つてゐる。

「併し原稿とりに足を運ぶ世話もなく、その點はいいでせう」

「それは全く世話なしです。何しろついてゐて校正までしてくれますからネ」

「私はまた校正が大好きなのです。絶えず何か校正刷りを讀んでゐないと寂しいのですネ。ですから自分の著書がない場合には、他人の校正を讀ませて貰ひます」

本屋さんには持つて来いの世話女房。

「奥さんの放送はおききになりますか」

「ききます。その時の気分が放送にはよく現れるものですネ。今日は疲れてゐるとか今日は健康状態が悪いとかいふ時は、言葉を間違へたり、息切れがしたりして聞きづらいものです」

「私は興に乗つて来ると一時が一時でも書き續けますが、かといつて一家の主婦であつてみれ

ばそれほどお寝坊もできませんので、睡眠不足になることが多いのです。さういふ時の放送はど  
うもうまくゆきませんで、歸るとよく夜更しをしてはいかんと叱られます」  
ワイ。天下の少年少女諸君、村岡のをばさんだつて叱られることがあるんですぞ。安心してよろ  
し。

「放送のために何か不便はありませんか」

「一週間に夕食の時間が變るのには閉口です。普通六時にたべることとしてゐますが、放送の

ある週は八時になります」

それでも一緒に御飯を召し上らうといふ心がけは、何處の御家庭へもおすすめしたきもの。

「二人一緒のおたのしみは？」

「映画と食道樂、家で仕事をすることが多いので、夕食をそとへたべにゆくのは何よりの楽しみ  
です、小説家はどうも時間が不規則になりがちなものですからその點小説家を妻にした人は随分  
なやまされるところを思ひます」

この裁判は大いに夫君へ同情ある判決を下します。  
最後にトシをきいだら

「そんな野暮なことをきくもんちやありませんワ」といはれる。

「僕は常に妻が卅五だと思つて居ります」

村岡さんが取りなすやうにかう言ひ添へる。女直木三十五といふ所であらうか。

「いくつ違ひますか」

と夫君にきくと

「七つ違ひです」

とのこと。この差には四季を通じ生涯を通じて變化ないワケですから、皆さんに簡単なダンザンをして頂くことにしよう。

## 女房に食はせて貰ふ

### 氣持は憂鬱だつた

日本酒ならまづ一升・ウイスキーなら一本

【夫】 新進作家 丹羽文雄君

【妻】 酒場 トミイのマダム

この夫妻は同じ屋根の下に住みながら、別々の家に別々なことを考へながらその日その日を送つてゐる風變りな御夫婦である。

京橋のSアパート。その三階のとつゝきの部屋に「丹羽」と表札が出てゐる。ノックすると眉目秀麗な青年が現れた。女なら、ひと苦勞して見たい顔である。六疊ひと間、机と本棚の前で――

「なぜ別々に住むのです」

「くへないうちはやむを得ず一緒にゐましたが、この頃はどうかやら小説で飯がくへる様になつたからです。僕は夜の十二時から夜明けまで仕事をするのですが、酒場のしまふのが大抵一時丁度僕が仕事にかゝつたところへ女房が酔つばらつて歸つて來られたのでは仕事はメチャノです。つい喧嘩にもなる。が僕はチャンバラのできないタチで氣持が内訌してしまふから益す仕事はできなくなるのです」



「奥さんにくはせて貰ふ生活はつらいでせう」

「實にいやなものです。経済的には頭がagaraないから始終何かにおしつけられてゐるやうで憂鬱になりますさういふ氣持からは、やつと解放されましたが……」

「酒場などをやつてゐると男とのいきつさも多いでせうから、そのために嫉妬を感じる様なことはありませんか」

「ありましたネエ。今ではもうさういふものだと思ひ込んでゐますから平氣ですが、初めは全く堪へられない氣持でした。かといつて爆發させてしまへば二人共喰へなくなるのですから二重の苦惱です。僕は黙つてヂツとこらへるといふ夕チなものですから、女房はそれが物足りないとい見え、もツとヤケ／＼といはれたものです。そんなことがいつの間にか今の様な小説を書かせることとなつたのでせうが、實際世間なみの戀愛生活を書く様な時は不安でたまりません。これでいいのかなアといふ心配がついて廻るのです。平凡な家庭の幸福な生活なんかトモ書けませんネ」

「別々に住んで性生活はどうします？」

「僕は男ですから社會的施設を利用すれば不自由しませんし、女房も毎晩泥酔して寝ればそんなこと考へるヒマがないといつてます」

「若しあなたに新しい愛人ができたら？」

「あゝいふ勝ち氣な女ですから表面はフ、ンと鼻で笑つてすますでせうが、内心たまらないと思ひます」

丹羽さん自信のほどをほめめかす。その翌朝、記者は丹羽さんの部屋住みから見ると五倍か六倍位大きいと思はれるマダム・トミイ邸宅にゐた。マダムはまだおやすみである。毎晩一時か二時頃泥酔して御歸館のマダムは、暫く妹さんを相手に母親らしい氣持を満足してから、午頃まで「豚の様に眠る」のだと後で聞いた。

「あなたはコワイ人だときいて來ましたが、そんなにコワくはありませんネ」  
と先づこつちの氣持を落着けてかかる。

「よくそんなことをいはれますが臆病なんです。夜酔つてゐないと猫が屋根を歩いてもビツクリ眼をさまして、朝までマンジリともしないことがよくあります」

「今の様な仕事をしていらつしやると誘惑も多いでせうネ」

「ありますネエ。バトロンになつてやらうといふ人もよく現れますが、その裏には第二號になれといふことを意味してゐますバトロンのゐる酒場は大抵うまくゆきませんが、これは人に頼ると

いふ氣持がぬけないからだと思ひます。損をすればパトロンが埋めてくれると思ふから仕事に精が出ません」

これはどの仕事にもあてはまる教訓。

「戀をする氣はありませんか」

「をかしくて……ただ一寸すきな人と浮氣をしたくない様な氣になることはありません」

「お酒は澤山飲みますか」

「初めは一杯のんでも苦しくなつたものですが、この頃では日本酒なら一升、ウイスキーなら角瓶一本位飲むと少ししい氣持になります」

記者はビツクリして逃げ出した。

職業婦人を女房にもてば

定價 十錢  
(送料 二錢)

著者

讀賣新聞社婦人部編

發行者

東京市麴町區有樂町二ノ二  
森 田 益 雄

印刷者

東京市下谷區南稻荷町五二  
高 野 彦 三 郎

發行所

東京市麴町區有樂町二ノ二  
森 田 書 房  
電話銀座四七一〇番四八二四番

印 檢

昭和十年七月卅一日印  
昭和十年八月三日發行

10.7.31

發賣所

冊子即賣普及會

(各驛賣店・ホーム・新聞スタンド・書店にあり)

東京市麴町區有樂町二ノ二

關西特約店

大阪市北區堂島上二丁目二五  
振替 大阪 五〇二九一番

(電話北 三九一)

新正堂書店

新刊全集 每月要 十月 各種發售 發行中

◆ 目 書 行 刊 ◆

職業婦人を女房に持てば	何が私を不良にしたか	失意のとき 心構へを禪にきく	商店經營問答	金も、名も、戀も	姓名で結婚運がわかる	異國の横顔	人は何故に貧乏するか	孟子の説法	孫子の戦法	へそくり問答	世渡り秘訣百ヶ條
讀賣新聞社編	讀賣新聞社編	山田 聖林	中外商業新報社	棋原 玉葉	棋原 玉葉	棋原 玉葉	高島 素之	谷 孫 六	谷 孫 六	谷 孫 六	谷 孫 六
定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢	定價 送料 十二錢

東京市麹町區有樂町二ノ二 森田書房 子冊即賣會

電話 四八〇二

終

京 東  
行發房書田森